

Title	大学付属研究所斯道文庫教授太田次男氏の学位称号授与；三田史学新入生歓迎会；三田史学会大会；東洋史学専攻大学院研究発表会；西洋史学会例会
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1971
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.43, No.4 (1971. 5) ,p.135(655)- 136(656)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19710500-0135">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19710500-0135</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 彙報

大学付属研究所斯道文庫教授

太田次男氏の学位称号授与

「平安末鎌倉時代に於ける注釈書並に選抄本よりみたる白氏文集受容に関する研究」

によって、太田氏は昭和四五年九月、文学博士の称号を授与された。論文審査担当者は森武之助（本塾大学文学部教授・大学院委員・斯道文庫長）阿部隆一（斯道文庫主事・同教授）竹田竜児（文学部教授・大学院委員）松本芳夫（大学名誉教授）の各氏。

三田史学新入生歓迎会

昭和四五年四月二四日

西校舎 五一七番

講演

ヨーロッパの田舎歩き

神山四郎氏

三田史学会大会

昭和四五年一二月一二日（土）

慶応義塾大学三田・西校舎五一七番教室

記録映写

タイとカンボジアのクメール遺跡を訪ねて

西岡秀雄氏

学術講演

初期アテナイの植民活動

真下英信氏

明末における中越関係の推移

大沢一雄氏

アンコール・ワットと日本人の墨書

清水潤三氏

学会報告

懇親会（西校舎教員会議室）

東洋史学専攻大学院研究発表会

昭和四五年五月二八日（木） 史学科共同研究室

「孟子の心性論」—— Mencius on the mind; I. A. Richards

——の紹介を通じ中国古典の解釈をめぐっての一般の問題点についてのノート 高山方尚氏

「山海経成立に関する一考察

——古代中国人の世界像との関連について—— 竜原武嗣氏

六月二〇日（土） 第一校舎一〇三番教室

一九〇五年ベンガル分割反対運動について 白田雅之氏

昭和四六年一月 日 東洋史共同研究室

荀子・商鞅・韓非子の国家論について

——理念的立場から現実的立場へ—— 高山方尚氏

西洋史学会例会

第五五回、昭和四五年一〇月二九日（木） 史学共通研究室

イギリス工場法と人道主義 宇野協子氏

ミトラス教神殿遺跡の研究

小川英雄氏

第五六回、昭和四四年一月一二日(木)

史学共通研究室

ハトシェプストのプント遠征に関する一考察

角谷純子氏

キリスト教世界の崩壊

近山金次氏

第五七回、昭和四五年二月一〇日(木)

史学共通研究室

エリザベス朝における政治と経済の考察

今村三南子氏

歴史の構想の問題

神山四郎氏

## 研究発表要旨

### イギリス工場法運動と人道主義

宇野 協子

イギリス工場法の成立過程において、キリスト教的人道主義の性格と限界を再考察する事がこの発表の目的である。

十八世紀末以来の宗教復興運動、福音主義運動と、産業革命のもたらした数多くの社会問題は、あらゆる階級の人々に道徳の自覚とキリスト教的人道主義の警鐘を鳴らし、諸々の慈善事業や奴隷解放運動を誘発した。中でも工場急速な発達の犠牲者として粗悪な設備の中で長時間労働を強いられた児童に対して、道徳的頹廢と身体的欠陥の悪弊から救う事は、良心的な個人の義務と考えられた。一八三〇年毛織物工業中心地のヨークシャーでリチャード・オースラーを指導者をして起こり、北部の全繊維工業地帯に波及した十時間法運動の最初の動機は人道主義の心情であった。工場法運動は、産業革命以後経済的地盤を漸く自力で確保し、

自由放任の原則により一層繊維製品の産出と貿易の増加を意図していた産業家、及び、選挙法改正以後の新風漲ぎる議会を基盤とするウィッグ政府の思惑と対立した。

第一に十時間法運動の推進者——オースラー、サドラー、アシュリー卿、ブル牧師、ステイブンス牧師——は皆、福音主義者であった。「工場法問題は実に：魂の問題である。ポンド、シリング、ペンスに対する魂の問題である」というオースラーの言葉にその態度は集約されるように、キリスト教的原理を混淆とした産業社会に樹立するのが一つの目的だった。労働者も暴力やストライキに訴える事なく、飽く迄温情的に工場主に接するよう進言された。この点、近代的な権利獲得としての労働運動の様相は呈さなかった。

第二に、人道主義の概念は家父長的理想主義に基づいていた。地主や教区牧師が地方の生活の中心で福祉問題に責任を負うべきと考えられた時代は遠い昔の事ではなかった。慈善行為は相互的義務、社会の道徳的紐帯であるという観念が根をおろしていた。従って父権的意識は社会改革の立法運動と必ずしも結合せず、寧ろ新興産業家が社会的実権を掌握しようとするのに対して、旧来の地盤を擁護しようとする反動的性格を備えていた。人道主義の支柱は理論に乏しく、道徳心、宗教心、過去への郷愁だった。その政策は前進的というより、狭量な手段——刑罰の強化、時間制限の強調——の踏襲の域を越えなかった。

第三にフィールデン、ブラザートン等工場主の中にも十時間制